

英語二列 堀田 シケプリ(A2) ~part1~

試験の日程など、もろもろのことは松井ちゃんのほう (A1) のシケプリ参照。

行の付け方は、ページの上から数えて何行目かにします。

彼女のやり方と違い、混乱させるかもしれませんが、よろしくお願いします。

あと誤字脱字があるかもしれませんが、大目に見てくれると嬉しいです。

よほど大きなミスや、言ってることがワケわからん場合には、メールくれると嬉しいです。

では、単語から

↓↓↓

A2 THE ORIGINS OF PIDGIN AND CREOLE LANGUAGES

~Definitions and development~

P9 (このページは残り少ないので、A2 の始まる In an article describing~から行を数えます)

L2 English: ここではイングランドの、イギリス人の、という意味ではなく、「英語を話す」と訳すとしっくりくる

L3 exemplify: ~を例証する ~のよい例である

L3 substantial: 量の多い かなりの

L4 precolonial: 植民地時代前の

P10

L1 typify: ~の典型となる (exemplify の paraphrase)

L1 sparser: まばらな 散在する

L2 subjection: 服従

L5 labour: 労働者達

L14 meanwhile: 一方

L14 sociolinguistics: 社会言語学

- L20 illumination： 解明するもの 明らかにするもの
L21 anonymous： 匿名の
L22 examination： 調査
L24 arguably： 議論の余地のあるくらいに
L25 recapitulate： ～を要約する
(capitulate： 降伏する)
L28 degenerative： 退化的な
L30 abstraction： 抽象概念
L33 coincidence： (偶然の) 一致
L35 genius：
L37 perfection： 完全、完璧
L37 being born： 決まった訳語はないが、
ここでは「生まれたばかりの」と訳す
L37 barbarous： 野蛮な
L38 savage： 野蛮人
L41 close：

P11
L4 contact language： 接触言語
L5 improvise： ～を即興でつくる
L10 needs： 必要性
L12 exclusively： もっぱら、と訳してもいいが、
ここでは **only** のニュアンス
L17 transaction： 取引
L18 redundancy： 冗漫
L19 plural： 複数 (形) の
L20 plurality： 複数性
L23 render： ～にする (make と同じ)
L27 now that： since と同じ
L32 intervention： 干渉、介入
L37 outline： ～の概略を述べる
L38 lifespan： 寿命
L41 decreolised： 脱クレオール化した
L42 extensive： 大量の 規模のおおきい
L43 African American： **Black American** をやわらかく表現した言葉
いい言い方ではないが、黒人のアメリカ人

L43 vernacular：方言 その土地固有の言語

P12

L2 British-based：ここでの British は、British English と同義
「英国英語を基礎とした」的に訳す

L2 patois：方言

L7 priest：聖職者

L9 Hebrew：ヘブライ人

L9 barter：物々交換

次に単語以外の豆知識的なものを

↓↓↓

< 1 >

P9 で Leith さんが英語を話す植民地を 3 つに分類しました。

授業の中で堀田は

第一のタイプのことを Displacement 型の植民地

第二のタイプのことを Establishment 型の植民地

第三のタイプのことを Replacement 型の植民地

と自分で命名してました。

・・・まあ試験には出ないとは思いますが。

< 2 >

P10 の L20 にでてくる、she とは Aitchison のことです。

Aitchison は女性です。意外ですね。

< 3 >

P10 の L22 ~Tok Pisin [a variety ~],

と [] がありますが、「これは引用した文章のなかにはなかった文章で、引用した側の著者がつけたした文章ですよ」というマークです。

また、P10 の L29 には

[P]idgin [are] simple, clumsy ~

とありますが、このマークも同様です。おそらく原文は

pidgin simple, clumsy～

のように、何らかの文法で、be 動詞が省略された形だったのでしょう。

< 4 >

P10 の L27 に **simplifying adaptations** とあり、これは極めて難しいです。授業の中でも 2 パターンの訳がでたので、書いておきます。

{ 1 }

adaptation という単語を「適応」と訳した

「簡単な方向への適応」という訳です。

simplifying adaptation = adaptation towards simplification

ととらえています。

ちなみに { 1 } が堀田の訳です。

{ 2 }

adaptation という単語を「構造」と訳した

「簡単な構造」という訳です。

堀田もこの訳は認めてはいましたが、やはり { 1 } のほうが安全でしょう。

< 5 >

P10 の L29 に ～evolved...[P]idgin～ とありますが、

この ... は、「引用した文章を、途中で省略していますよ」というマークです。

< 6 >

P10 の L32 で、人名に冠詞の 「a」 がついているのは、

この本の著者がその人物をよく知らないからだそうです。

「～という人」のように、よそよそしさを出した訳をすれば大丈夫! ?

< 7 >

P10 は文章の引用が激しいですので、ちょっとまとめておきます

P10 の L22 からの、**An examination of** ～という文章は

1996年に Aitchison が The Seeds of Speech を書く

↓

同年の 5 月 11 日の The Economist という本に、匿名の reviewer が Aitchison の上記の本への review を投稿

↓

その review を今度は McArthur が引用

↓

その McArthur の文章を、この本の著者が引用

< 8 >

P10 の L34 の Aitchison の 1991 年に書いた本からの引用で

Aitchison は pidgin とか creole が野蛮だと、ほぼ直接に近いくらい間接的に言っています。

しかし、Aitchison は pidgin や creole は立派な言語だと考えている人なので、この記述はおかしいように思われます。が、堀田曰く、

Aitchison は自分の著書の中で、わざわざ自分の意見と対立する意見を引き合いに出し、おそらくそれを論破していると思われる！

とのことですよ。

ちなみに、この本の著者は、文章の書き方から、pidgin や creole は立派な言語だと考えている人サイドであろう・・・(by 堀田)

以上です。

みんなで試験頑張りましょう！